

シノドス国際社会動向研究所メルマガ 20170324

「理論打ち合わせに関する報告」

橋本努

「新しい政治を生み出すために、シノドス国際社会動向研究所をつくりたい！」

このような声を発してクラウドファンディングを始めたのは、2017年2月15日のことでした。

それ以来、わたしたちは研究所を「一般財団法人」として立ち上げるために、さまざまな準備を続けています。

3月22日には、シノドスのホームページにて鼎談を掲載しました。

翌23日には、吉田徹先生（北大・法）と橋本（北大・経）の二人で、最初の理論的な打ち合わせをしました。

以下、その打ち合わせについて、簡単にご報告いたします。

いまの政治に不満を抱いているわたしたち。でもわたしたちは、どんな政治を求めているのでしょうか？ 新しい政治を求めるわたしたち自身の「価値基盤」は、どこにあるのでしょうか？ 自分と同じような関心や意識をもっている人は、ほかにどのくらいいるのでしょうか？ 実はそうした肝心なところが、よく分かっていないのではないかと。それではいけない、という認識からわたしたちは出発しました。

新しい政治のための政策パッケージについて検討する前に、日本人の社会意識を問いただして、これを可視化してみたい。そのためにはなによりも「社会調査」が必要ですが、でもどんな「アンケート項目」で社会調査をするのかが問題になります。有効なアンケート結果を得るためには、価値意識の対抗軸について考える必要があります。平板な質問をしても、政治の対抗軸は見えてこないでしょう。

シノドス国際社会動向研究所（シノドス・ラボ）では、新しい政治を求めている「新しい中間層」の人たちを見つけてみよう、そのための理論を作ってみよう、と思っています。

この日、吉田と橋本は、お互いに作成したメモを突き合わせて、論点を一つずつ明確にしていきました。

政治を語るとき、わたしたちはよく「リベラル」とか「市民派リベラル」という言葉を使います。しかしこの「(市民派) リベラル」という言葉は、時代によって意味する内容が変化してきました。わたしたちはこの言葉に、現代にふさわしい意味を見つけたい。そのためにはいろいろな座標軸のなかから、どの座標軸が重要なのか、新たに必要な座標軸はないか、という検討をする必要があります。

これまで「市民派リベラル」と呼ばれる人たちは、高学歴で、都会に住んでいて、比較的若い、という特徴があると指摘されてきました。大卒で、都市に在住で、若い人たちは、たしかに政治に変化を求める進歩主義の傾向がありました。ところが最近では、こうした社会

層の人々は、もはやリベラルの供給源とはなっていません。ではリベラルを支持する人たちは、どんな社会層の人たちなのでしょう？ わたしたちはこの問いに、有効な答えを与えなければなりません。そのためには人々の属性について、別の角度から質問していくことが必要になるでしょう。

これまで「市民」とか「リベラル」という言葉には、政治に参加する意欲が高く、また能力も高いというイメージがありました。しかし実際にリベラルな政治を支持する人たちは、それほど政治に関心があるわけでもないかもしれません。もしかすると、政治には意外と無関心かもしれない。そういうサイレントな、いわば小声のリベラルな人たちの属性についても、わたしたちは検討してみたいと思っています。

別の角度からみると、新しい中間層、あるいは新しい現代のリベラルについては、次のようなことも言えるかもしれません。

「リベラル」な人は、「人々の基本的なニーズ」が満たされている平等な社会が望ましいと考えます。たとえば、だれでも最低限の所得が保障されている社会だとか、だれもが基本的な権利を保障されているような社会です。でもおそらく、現代人の多くは、このような考え方を否定しないでしょう。その意味で、多くの人はずでに「リベラル」化しているのです。

問題はここから先です。

基本的な権利だとかニーズについては、保守的な人々も賛成している。その意味で現代の保守とは、リベラルな保守です。それでは、保守的ではない、新しいリベラルとは、どんな人たちなのでしょう。そのような人々を可視化するためには、権利について質問するのではなく、別の質問をする必要があります。そこで私たちは、「権利や正義を重視するリベラル」に加えて、「個別的な配慮を重視するリベラル」の存在を想定します。わたしたちはリベラルな意識をもった人を、「権利」と「配慮」の二段階構えで捉えてみたい、と考えています。

この他にもいろいろな論点について議論しましたが、それらについては、理論の骨組みがある程度固まったところで、あらためてご報告したいと思っています。

引き続き、シノドス・ラボの研究にご関心をお寄せいただけますと幸いです。